神野新田の堤防と三十三体観音様

☆神野新田の堤防の歴史☆

神野新田地区は、海抜０メートル地帯で、もともとが干拓地であるため、海より低かった。江戸時代中期に、海岸を干拓して新田を開発する事業がさかんになってきた。この頃、豊川や梅田川の河口はあしなどの生えた低湿地になっていた。そこに用水路や排水路をつくって、荒地を水田や畑にした。また、海が満潮になると、海水の入ってくる低湿地やひがたに周辺の土を掘り上げて、８０から９０センチメートルほどの土の堤防をつくり、干拓地として、田や畑を開いた。機械のない時代だったので、作業はすべて人の力だった。堤防も現在のコンクリー

波などの災

ばだった

強い堤防が必要！

★服部長七

金之助から依頼を受けた長七は、毛利新田の下見に行った。自分の持っている技術を最大に使うことができれば、これまでにない立派な堤防をつくることができると確信した。

秘策・・海側に人造石を組めば、どんなに強い波にも負けない堤防ができる！！

こう

者た

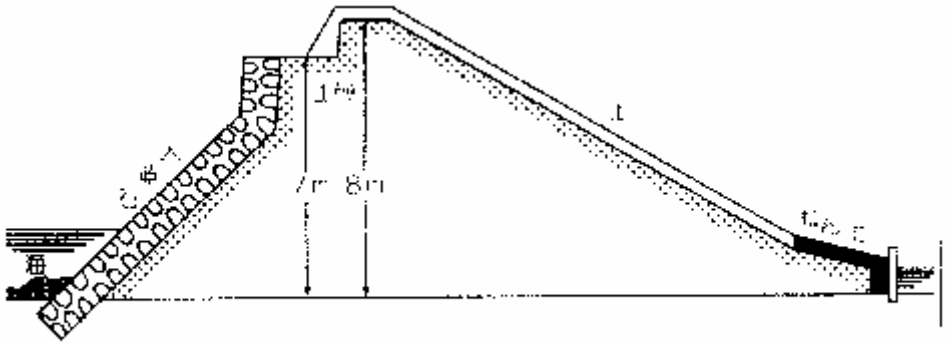
上で

た

★神野金之助（1849~1922）

売りに出された毛利新田に名乗りをあげたのが、名古屋の大商人神野金之助。金之助は菱池干拓に成功したあとだっただけに、新田開発に魅力を感じた。何度も開発に失敗している新田だけに、その開発は無理だとうわさされていた。

しかし、彼には自信があった。服部長七が人造石を使って港工事をしていたことを使えば、強い堤防をつくることができるのではないか。



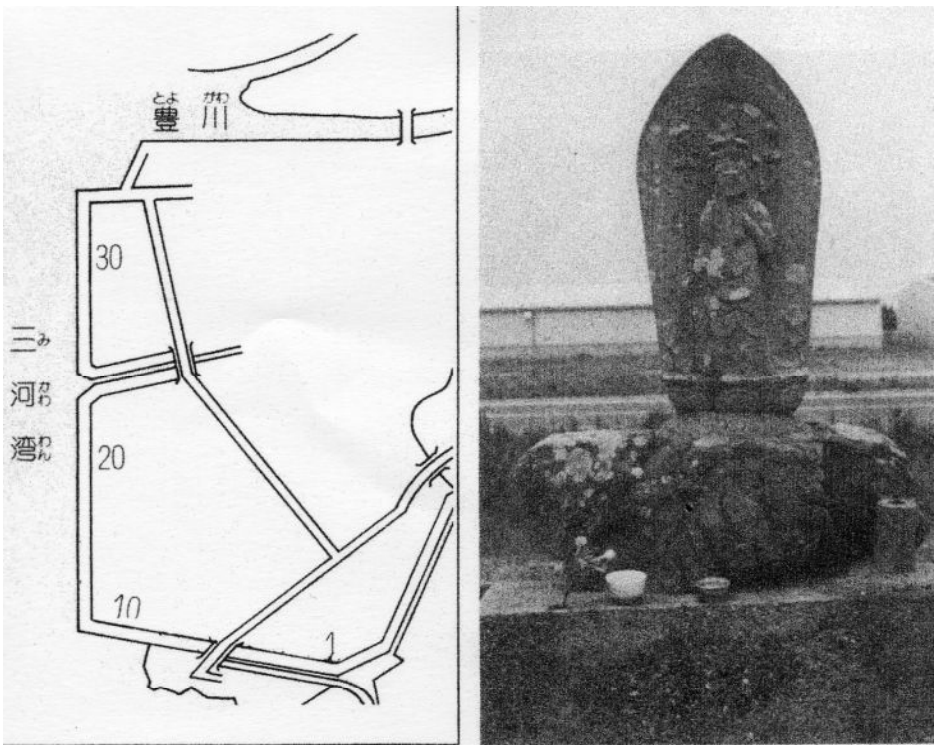
堤防のしくみ　―「神野新田」―　　（「むろ」より転載）

多くの労力と資材によって、神野新田の堤防は完成！！！

金之助

干拓地で一番心配なことは、堤防が壊れることだ。そうだ、長い堤防６km に、180m 間隔で三十三体の観音様を置くことにしよう！！

起点には、一番から三十三番までつけてある大日如来の石像を置いた。新田の人たちが、その観音様におまいりしたり、花を上げたりしていく時、堤防の弱いところを発見できるから。
この計画を聞いた時、その観音様の寄付を申し出る人たちが多数いた。今もならんで立っている観音様は、すべてそのような人たちの好意でたてられたものなのだ。



観音像と観音像のたっているところ　　（「むろ」より転載）

出典　「むろ」昭和６２年３月１０日
豊橋市立牟呂小学校　校区読本編集委員会

牟呂小　大桑　早紀子